ドコモ「反撃」の切り札にも

大容量化進むケータイ動画

大容量の動画配信が可能な新プラットフォームの登場で、ケータイ動画市場が活気づいてきた。ネットワークの大容量化にメドを付けたドコモは動画を切り札に反撃に転じる気配をみせる。

文◎**藤井宏治**（ジャーナリスト）

3G携帯電話のキラーコンテンツと囁かれながら低迷が続いてきた携帯電話向け動画コンテンツのマーケットが、ここにきて立ち上がる兆しを見せ始めた。

昨年来、携帯電話の動画配信に新規参入する企業が相次いでおり、動画配信を活用したプロモーションも目に付くようになっている。

一部のコンテンツプロバイダーからは、収益の見通しが見えてきたという声も聞かれる。

この要因としては、まず、動画が閲覧可能な3G携帯電話の普及でユーザーの母数が拡大したことや、定額制パケット料金の普及など大容量コンテンツを利用しやすい環境が整備されてきたことがあげられよう。

さらに、①HSDPAやEV-DO Rev.Aなどの高速通信サービスの登場、②ワンセグの標準装備に象徴される端末の高性能化、③これらを背景とした新たな動画配信プラットフォームの登場により、ケータイ動画コンテンツ自体の商品力が格段に向上してきていることも重要なファクターだ。

KDDIとNTTドコモは相次いで、10MBの大容量動画配信プラットフォームを導入した

見逃せないのが、携帯電話事業者の動画配信に対する姿勢に大きな変化が生じ始めていること。詳細は後述するが、展開次第では携帯電話向け動画が事業者間の競争を左右する鍵となる可能性も秘めている。

携帯電話動画配信を巡る新たな動きとその影響を探った。

データサイズは20倍に

まず、配信プラットフォームの動向を軸に、携帯動画配信市場の最近の動きを眺めてみることにしよう。

携帯電話向け動画配信に用いられるシステムでポピュラーなのは、ドコモの「iモーション」、KDDIの「EZムービー」、ソフトバンクモバイルが旧システムの後継として5月から提供を開始した「Yahoo!動画（ベータ版）」などの事業者系プラットフォームである。これらは、各社の携帯電話インターネットの公式サイトで用いられているほか、勝手サイトにも開放されている。

この分野での最近のエポックといえるのが、NTTドコモが今年2月に導入した「10M iモーション」である。

これは、従来最大500KBだったiモーションの動画データサイズを20倍の10MBに拡大し、より高精細、あるいは長時間の動画の配信を可能とするもの。HSDPA対応のF903iX HIGH-SPEED 、P903iX HIGH-SPEED、N904iの他、HSDPA非対応の904iシリーズでも利用可能となっている。

iモーションでは10〜15秒程度の動画しか配信できなかったが、10M iモーションではQVGAのフル表示で5分程度の動画配信が可能になる。さらに903i/904iシリーズ向けには、MPEG4だけでなくワンセグにも用いられているH.264コーデックの利用が可能となり、画像も高画質化した。このような機能向上を受け、ドコモでは10M iモーションを「ビデオクリップ」のサービス名でユーザーに訴求している。

従来のiモーションと同様、DRM（Digital Rights Management）関連を除く仕様は一般に公開されており、勝手サイトでの導入も可能だ。ユーザー以上に10M iモーションの登場を歓迎したのはコンテンツプロバイダーだろう。「今まで温めていたものがようやく提供できるようになった」（コンテンツプロバイダー）からだ。